

# 「CP+ (Camera & Photo Imaging Show) 2019」

神谷 直亮

カメラと写真関連機器のコンシューマー向け展示会「CP+2019」が、2月28日から3月3日まで横浜市のパシフィック横浜と大さん橋ホールで開催された。主催したカメラ映像機器工業会（CIPA）の発表によれば、出展者は124社・団体で、総来場者数は69,615人に達し過去最多を記録したという。

まず、今回の全体的な印象を述べると、「写真を、カメラを、自分らしく楽しめるヒントが見つかる2日間」と題する「フォト・ウィークエンド」を設けたり、「フォト・カルチャーを体感・発信するアート・コミュニティスペース」を謳った「PHOTO HARBOUR」を開催したりして、写真愛好家（特に女性）の裾野を広げようというたくさんの試みがなされていた。

次いで、プロ向け動画エリアを特設して、最新の動画ソリューションを全体的に手際よく紹介していた。特に目に付いたのは、360度動画撮影に新しい潮流を巻き起こしつつある「Insta 360」と「Obsidian」だ。さらに、「ミラーレス新時代」「高感度撮影&タイムラプス撮影」「レンズ交換式デジタルカメラ」などをテーマにしたキーノートスピーチ、セミナー、技術アカデミーなど、最新の情報を聴取する機会がたくさん設けられており来場者が駆け巡っていた。

正直なところ上述したような状況下で、到底すべてをカバーすることはできなかつ

た。本稿では、メイン展示会場とプロ向け動画エリアに絞ってレポートする。

メイン展示会場には、キヤノン、ソニー、パナソニック、ニコン、FUJIFILMの5社が大きなブースを構えて競演していた。

キヤノンは、「RFマウント」を採用した小型・軽量でありながら高画質な写真撮影が可能な35mmフルサイズCMOSセンサー搭載のミラーレス「EOS RP」カメラを目玉にして出展した。3月中旬から発売するという売り出し直前の製品で、体験を希望する来場者が長蛇の列を作っていた。ブースの担当者は「RFレンズに加えて、専用のアダプターを装着することでEFレンズやEF-Sレンズにも対応できる。最新の映像エンジンDIGIC 8との組み合わせにより有効画素数約2620万の撮影が可能」と語っていた。さらにキヤノンは、東京オリンピックのゴールドパートナーになっていることもあり「カラーバリエーションとして、ゴールドモデルを5000台限定で発売するので、ぜひ購入して欲しい」と付け加えていた。

ソニーは、Eマウントシリーズの35mmフルサイズミラーレス一眼カメラ「α9」「α7R」「α7」に加えて、αシリーズの最新カメラ「α6300」を前面に押し出して出展した。「小さいのにキレイ」「小さいのに速い」「小さいのにカンタン」を謳ったこのミラーレス一眼カメラは、APS-CサイズのエクソモアCMOSセンサーを搭載

し有効画素数約2420万を誇っている。同社のブースでは、もう一つの新製品として大口径望遠単焦点レンズGマスター「FE 135mm F1.8 GM」の売込みに余念がなかった。発売は4月19日で、メーカ希望小売価格は235,000円とのことであった。

パナソニックは、同社初の35mmフルサイズイメージセンサー搭載ミラーレス一眼カメラ「DC-S1R」「DC-S1」を目玉にして出展した。ブースの担当者によれば「DC-S1Rは、有効画素数4730万の文句なしの高画素カメラで、S1は、有効画素数2420万ではあるが幅広い常用感度域を実現している」と語っていた。

ニコンは、「ニコン史上最高画質フルサイズミラーレス」を謳った「Z7」とオールラウンドフルサイズミラーレス「Z6」を紹介した。「Zマウント」を核にしたこれら2種のミラーレスカメラの有効画素数は、それぞれ4575万、2450万とのことであった。同社は、これに合わせNIKOR Zレンズ2種（24 - 70mm f/2.8 Sと14 - 30mm f/4 S）の体験コーナーも設けていた。発売は、4月を予定しているという。

FUJIFILMは、ミラーレスデジタルカメラ「FUJIFILM X-T30」を出展して「高精細かつ滑らかな4K動画をハイレゾリューション音質で記録し、本格的な映像制作ニーズに応える」とPRに余念がなかった。有効画素数と発売予定を聞いてみたら「約2610万画素。発売は3月下旬」との回答であった。

結論として、フルサイズミラーレスカメラにおけるソニーの牙城が崩れ、キヤノン、パナソニック、ニコン、FUJIFILMを交えた5社による激戦の場になったと言える。

上述した大手5社以外では、リコーの「THETA」、DJIのドローン、エム・エス・シーの「PICTAR」が目を引きいた。



写真1 キヤノンは、フルサイズCMOSセンサー搭載のミラーレスカメラ「EOS RP」で注目を集めた。



写真2 ソニーは、αシリーズの最新カメラ「α6300」を前面に押し出して出展した。



写真3 ニコンは、同社の史上最高画質フルサイズミラーレスを謳った「Z7」を紹介して注目的になった。



写真4 リコーは、360度静止画や4K動画に対応する第3世代の「THETA Z1」を披露して注目を集めた。



写真5 エム・エス・シーは、iPhoneにドッキングすることで一眼レフカメラの使い勝手を再現するという「PICTAR」を出展して来場者の意表を突いた。

リコーの「THETA」は、本展示会ですっかりおなじみになったが、今回は、「THETA SC」「THETA V」に次ぐ第三世代の「THETA Z1」を披露して注目を集めた。特色は、1.0型裏面照射 CMOS イメージセンサーを採用して、23MP相当の360度静止画や約40分の4K動画に対応している。発売予定と価格を聞いてみたら「3月末に129,000円で発売の予定」とのことであった。

リコーのブースではもう一点、全天候型タフネスカメラ「WG-60」が関心を買った。インスタ映えがブームになってきていることを踏まえ「スマホでは撮影できない水深14mまでの水中撮影が可能」と言うのがウリである。

DJIのドローンも本展示会ですっかり定着した感がある。今回同社は、「大きなビジョンを、大空へ」をキーワードに掲げて「MAVIC 2」のデモをブースで繰り返していた。Hasselbladのカメラを世界で初めて搭載したのと、ズームに光学2倍を採用しているのが特色だ。

エム・エス・シーの「PICTAR」は、ほとんどのiPhoneに接続できるスマートフォン用のカメラグリップで「ドッキングすることで一眼レフカメラの使い勝手を再現できる」という便利さで関心を買った。今

回は、すでに販売している「ONE」「ONE PLUS」に加えて、次世代モデルの「PRO」を紹介し「6月に発売予定で、価格は4万円くらいになる」と語っていた。iPhoneカメラそのものによる撮影とどこが違うのかを念のため聞いて見たら「5つの外部ボタンによる追加の調整と操作を行える。シャッターボタンでフォーカス・露出固定が可能」との回答であった。

一方、プロ向け動画エリアには、ソニー、パナソニック、FUJIFILM、ハコスコ、三友など20社が軒を並べていた。

ソニーは、XDCAMメモリーカムコーダー「PXW-Z90/Z190」とHLG方式の4K HDR記録に対応するハンディカム「FDR-AX700」を目玉にして出展した。「PXW-Z90」については、「4K XAVC QFHD Long 4:2:0 100MbpsとFHD XAVC HD Long 4:2:2 50Mbpsのマルチフォーマット記録ができる」と語っていた。

パナソニックは、メモリーカードカメラレコーダー「AG-CX350」の売り込みに力を入れていた。4K HDR 10bit収録に 대응する1.0型ハイエンドハンドヘルドで、NDI-HXによるIP接続、RTMP/RTSPストリーミングに対応している。

FUJIFILMは、長時間にわたるホールディングや繰り返されるレンズのスイングなど、機動力と耐久性を強調した「X-H1」を紹介して「防滴、防塵、耐低温性を備えながら軽量でコンパクトに仕上がっている。グローブを装着したままでも操作しやすい」と語っていた。

ハコスコは、プロ仕様の高解像度8K 360度カメラ「Insta360 Pro2」を出展して来場者の意表を突いた。このカメラは、8K 3Dの動画を手軽に撮影できるというのがウリである。具体的には、7680x7680 30fpsの8K 3Dまたは7680x7680 60fpsの8K 2Dの撮影を実現する。

三友は、2種の「Obsidian」360度3D VRカメラを披露して、ハコスコと張り合っていた。1種は、「Obsidian S」でもう1種は「Obsidian R」である。Obsidian Sは、360度3D VRカメラで、特色はハイスピードだ。4Kx4Kの場合は120fps、6Kx6Kの場合は60fpsの撮影を実現する。Obsidian Rは、解像度を追求しており8Kx8Kの場合は30fps、4Kx4Kの場合は60fpsの撮影ができる。

Naoakira Kamiya  
衛星システム総研 代表  
メディア・ジャーナリスト